

■読み書きツールの必要性を感じていましたが、限られた予算で、何を優先して手に入れたらいいのかわかりませんでした。ツールの具体的な使い方の説明、実際に視聴覚障害者がどのように使うのかを聞いて、イメージができました。

こういうタイプの問題の読解、聴解教材を使う場合、どのような工夫をしたのかということが、非常に具体的によくわかりました。そして、自分の教えた場面を振り返り、聴覚だけでなく、触覚をもっと利用して教える方法を検討したほうが良かったと気づきました。これから学内一斉試験の問題をどう実施するか考えなければならないのですが、非常に参考になりました。

■研修会に参加させていただき、ありがとうございました。現在、初めてほぼ全盲の留学生を受け入れています。実際に同様の留学生をご担当された北川先生のお話は大変参考になりました。というより、参考にして、できるだけ配慮・調整をしていきたいと思いました。ありがとうございました。

■本や論文では知り得ない具体的な実践例について知ることができました。また、具体的な話の中にも、キラリと光る名言が何度も出てきたのが印象的でした。理論ではなく、経験が積み重なって出てきた言葉だからと思います。

■帰宅してからも興奮さめやらず、今からしたいことをリストアップするとすぐにノートいっぱいになりました。具体的には、学生自身の ICT 環境を整える手伝いをする（スクリーンリーダー、ブレイルメモなど）、点字で行う学内試験のレイアウトを検討するために EJU などの大規模試験の点字問題を取り寄せる、などです。

学生のために配慮して音データを作っていたつもりでしたが、負担をかけているのではないかということにも気づけました。煩雑な作業に追われてインデックスを付けるのが雑になっていたかもしれないと反省し、もう一度インデックスのつけ方を見直そうと思っています。

今回このような形で視覚障害者の方と関わらせていただく機会を得たので、何かの形で情報発信していきたいと思っています。また情報共有させていただく場があれば幸いです。

■研修後、特に考えさせられたことは何ですかと問われたら返答することができたのですが、昨日Rさんがいるクラスで読解と聴解の授業をした今は、「研修すべてが重要であり、考えさせられた」と答えます。どこかを選ぶことができません。食事をしながらも研修内容を自分なりに消化できるように考えていましたが、今もそれは続いています。

「こうすればいいのかな」と思う瞬間もあるのですが、苦しい日が続いています。

■研修に参加させていただき、何より今後の言語教育における自分の責務を強く感じました。

私は現在、日本語教育の業務に関わりつつも、韓国語教育の現場を持っています。日本人が集まる教室にもいろいろな障害を持つ学習者がいます。障害を持つ学習者に寄り添うとはどういうことなのか、北川先生をはじめ、深い議論をされていた参加者の皆様に、深く考える機会をいただきました。実は今も考えているのです。今回のお話は視覚障害以外にも他の障害にも共通する部分があったかと思います。必ず現場で活用させていただきます。ありがとうございました。

■本日の特別研修会に置いて特に印象に残った点を簡単に述べさせていただきます。

まず、冒頭で北川先生がおっしゃった、私たちの方が障害のある学習者にアクセスができない、どうアクセスすべきなのかを考えなければならない、というのがとても印象的でした。

そのため、幾つかの点で工夫が必要になるわけですが、視覚によって得られる情報を他の感覚—聴覚や触覚、臭覚などを最大限に使って理解してもらい、ということが具体的にどのようなことなのか、体感できないとどのようなことになるのか一面ではなく、線でしかない動きへの理解やバーバリズムなどがわかり、本当に貴重な講義となりました。(ヘレンケラーの伝記にあるように WATER を理解することがどのようなことなのかは知識として知っていても、です)

いろいろな身近で安い材料を使っての工夫等、すべてのお話は目からウロコ、でした。

しかし、何よりも、視覚に、コンテキストに依存している部分を少し補うだけでも理解し易くなること、言い換えれば、少しでも補わないと理解しがたいという現実、そして、それをどのように補っていけば良いのかを具体的に例示していただいたことが、本当にありがたいことでした。

また、視覚に障害を持つ人たちにとって何がストレスとなるのかを考えることは、それは他の障害を持つ人たちのこと、ひいては、すべての学習者にも通じることだと感じ入りました。

■ 視覚障害の留学生の日本語教育について、大変貴重なお話を聞くことができ、うれしく思いました。

北川先生の実践報告は、ここまで相手の視点にたって想像力を働かせ、より良い授業実践へと取り組んでいけるものなのかと感動しました。

自分はここまで込めて取り組んだことがあったらどうか。それに、まだまだ改善できる余地がたくさんある。そんなことを反省しました。

学生ががんばれば自分でできること、できないことを見極めつつサポートしていく過程のお話の中で、自分も見えなかったことが見え、気づかなかったことに気づかされました。

また、淡々と語られる活動報告の中で、お互いが幸せであるための創造的活動が次々に生み出されていく様子も大変興味深く思いました。

その原点となったという留学生のお父さんのきびしいお言葉も、私の中にも大きく今でも響いております。

貴重な機会を本当にありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたしております。

■ 指導する側が障害のある方にとって不便だと思われることを予測して準備することの大切さは分かっている、実際に指導するという経験がなければ、気がつかないことがある。それはどんなことか知りたいと思って参加しました。

北川先生の実践から、その工夫のすごさに感心しましたが、同時に、障害のある方、今回の研修では視覚障害の方が『視覚』を補うための力として、『聴く力』『触って分かる力』が研ぎ澄まされていることに気がつきました。

わからないだろう、できないだろうという考えを持つ前にその方たちに備わっている力を予測する必要があることが大切だと思いました。それはその能力に期待するということもあるかもしれませんが、それよりも、その能力ゆえにいい加減な準備ではすまされないということです。それにも想像力と細心の注意が必要だと思いました。

研修会では「海」をわかってもらう手段として『海の波の音』を使うと言うお話があって、そのときに放送などで使われる効果音(小豆を動かして出す音)を使ってみるのはどうかという声もありましたが、それはとんでもない間違いではないかと思いました。

聴覚が研ぎ澄まされている人には「小豆の音」と「海の波の音」は明らかに違って聞こえるだろうと思ったからです。

私は以前、難聴だったタイの学生に大きな声で話しかけて分かってもらおうとしたことがあります。今になって、彼が持っていた他の力を想像できなかったことが悔やまれてなりません。

■北川先生のお話は実体験に基づいているので、非常に説得力のあるお話でした。視覚障害者に教えるときの配慮や、健常者の他の学生との関係など、教師が考えていかなければならない視点を語られましたが、それは視覚障害者に対してだけでなく、どの学生にも当てはまる、接し方であると思います。多様な学生に対しての視点に気づかせていただき、とても学びが多い研修会であったと思います。

私は視覚障害者、聴覚障害者、自閉症の学習者と接する機会が最近あり、今後の考え方や学び方に多に勉強になりました。

■先日の研修では、実践に基づいたお話で、一つ一つが自分の体験の中の悩みに対し、何かしらのヒントをいただいたようでした。

視覚障害者を担当したことはありませんが、研修で教えていただいたことは自分自身の学習者に対しての姿勢を振り返る貴重な機会になったと思います。